

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京華高等学校

受験番号
氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

身の回りのことを自分の言葉で書けと言われても、何をどんな風に書いていいか、卓也には全然分からない。清田も今頃、班ノートを書いているのだろうか。どんな文章を書いてくるのだろうか。気になるが、そんなことより自分の班ノートを書かなくてはいけない。

店のざわつきが気になる。母親の「ありがとうございます」の甲高い声がイラつく。父親のせいで店番させられることがムカつく。そうだ、イヤな店番のことを書こうと思った。でも、言葉が出てこない、出てこない。出てこない、と焦って、イライラしている内に、店番のイヤな気分が、ちよつとずつ言葉になって出てき始めた。ひとつずつ書きつづっていくと、班ノートを2ページも使っていた。

A みんなが書いている文章とはずいぶん違うと思ったが、野球で得られる充実感とは別の感情が、卓也を満たしていた。
こんな気分は初めてだった。

翌日の朝のホームルームの後、卓也は志水先生に班ノートを渡した。

「おお、山口、本当に書いてきたんだ。これは驚きだな。清田はどうだ？」

教室の後ろの席に座っている清田に向かって、志水先生が声を掛ける。

「書いてません」

清田は相変わらずのふてくされ声で答える。

「でも、必ず書いてこいよ、いいな」

志水先生が念を押すが、清田はそれには答えない。志水先生はそれ以上言わずに、卓也の班ノートを開くと、卓也の書いた文章を目で追っている。¹読み終えて頭を上げた志水先生の目には涙がいつぱいたまっていた。

「山口、これは詩だよ。まさしく詩だ。いい詩だよ」

先生に「いい詩だ」「いい詩だ」と言われても、何が「いい詩」なのか卓也には分からないが、とにかく、「いい詩だ」と褒められたことがうれしかった。卓也は自分の席に戻りながら、昨日、班ノートを書き終えた後と同じ、妙に豊かな気分になっている。

席に着いて前を見ると、志水先生が卓也の詩を、黒板に書き始めている。

【X】「宙ぶらりん」

ぼくの家は花屋

町の小さな花屋

店番していると

子どもでもない

中学生でもない

おとなでもない

なんでもない

何だかわけのわからない

宙ぶらりんのぼくがいる

でも、同級生の女の子が

お母さんと花を買いにくると

宙ぶらりんのひもが

ぶつんととつぜん切れて

宙ぶらりんのぼくは

どさつと花の上に落とされる

きれいな花の上に落ちて

花の水がひっくり返り

店じゅう水であふれ

いくらかがいても

出られなくて

あつぶあつぶと、

ぼくは水の中でも

宙ぶらりん

黒板いっぱい卓也の詩が書かれた。

タイミングよく、ホームルームのあとの一時間目の授業は、国語である。

「これは立派な詩だ。いい詩だ」

志水先生は声を震わせて、同じセリフを繰り返して、目には涙が光っている。

「みんな、この詩を小さな声で、各自、読んでみてください。〈花屋〉の言葉でクラスの誰が書いた詩か、大体みんな分かるだろうけど、そんなことはどうでもよろしい。この詩には、家が花屋であっても花屋でなくても、どんな子にも共有できる恥ずかしい、寂しい、いやだ……逃げ出したい……それから、あとどんな感情があるかなあ……まあ、そういうマイナスの気持ちだが、表現されています。そして、そういう気持ちを〈宙ぶらりん〉という言葉で表したのが素晴らしい。〈中途半端〉という言い方もあるが、それだと普通なんだ。〈宙ぶらりん〉という言葉が発見したことで、この文章が詩になり、全体が光り出したのです」

志水先生は、自分の言葉に感極まり、涙を流している。泣いている先生を見て、クスクス笑っている生徒も何人かいるが、クラスのほとんどの子が、卓也の詩だと気づいていて、卓也の方に視線を向けてくるから恥ずかしくてしょうがない。

「志水先生、もういいから、やめてよ。黒板消して、早く教科書にいつて！」

と、心の中で叫び続ける。さっきの褒められたうれしい気分など吹っ飛んで、とても顔が上げられない。

卓也は顔を伏せたまま、2列先の清田を見ると、清田は、肘をついた手に頬ほおをのせて、窓の外まはの遠くをじっと見ていた。

こういう教室の空気を、清田はどう思っているのだろう。班ノートでも、卓也に対する対抗心をむき出しにしてくるのだろうか。それとも、書くことがないと言って、ずっと班ノートを書かずに、志水先生に抵抗するのだろうか。

「……、班ノートからこんないい詩が生まれるとは思っていませんでした。みなさん、班ノートを書くのが面倒くさいと思わず、これからも、正直に書いてください」

志水先生はズボンのポケットからハンカチを取り出し、涙を拭った。

その日の野球部の練習は声出しだけではなく、キャッチボールもさせてもらった。清田はすっかり卓也の球を受けてくれるが、ひと言も口を開かなかった。

それからしばらく経って、放課後、また、卓也と清田の二人が残された。

「山口、今日、清田も班ノートにいい詩を書いてきたんだよ」

「先生、わざわざ、山口に見せることないじゃないか！」

「誰でも読んでいい班ノートだから、一番最初に、山口に読ませたいんだ。山口、読んでみろ」

「やめろよ」と言う、清田をしり目に、志水先生が清田のページを開いて、卓也に班ノートを渡した。角ばったきれいな字がきちょうめんに並んでいる。

【Y】「ひとりぼっち」

ひとりぼっち

ひとりぼっち

爆弾かかえて

みんなもひとりぼっちなのを

わかってるから

オレはひとりぼっちを

辛抱できる

ひとりぼっち

ひとりぼっち

人を殴りたいほど

みんなもひとりぼっちなのを

わかってるから

オレはひとりぼっちを

辛抱できる

ひとりぼっち

ひとりぼっち

月がひと間を照らして

みんなもひとりぼっちなのを

わかってるから

オレはひとりぼっちを

辛抱できる

清田が班ノートを書いてきたのは、意外だった。卓也は漠然と、清田が班ノートをずっと書いてこないと思っていたからだ。それに、中学生とは思えないくらいきれいな大人びた字を、清田が書くことにも驚いた。

卓也は声には出さず、目で追いながら清田の詩を読んだ。

清田の詩は、同じ言葉とフレーズの繰り返しで、どの連もたった一行が違うだけだ。それに乱暴でけんか早い清田が、〈ひとりぼっち〉や〈辛抱〉という言葉を使っていることが不思議で、卓也は胸の辺りがざわざわするようになった。²

「どうだ、山口。清田の詩もいいだろ」

「はい。よかったです」

「どこがよかったか、言ってみろ」

「どこがって言われても……んっと、〈ひとりぼっち〉の繰り返しだが、読んでて気持ちよかったです。それに、なんだかへんな気持ちになりました」

「そっだよな。先生もそうだったよ。山口の詩の〈宙ぶらりん〉も、清田の〈ひとりぼっち〉も、言葉は違うが、突き詰めていくと結局は一緒になるんだ、分かるか？」³

「いや……分かりません」

「清田はどうだ？」

そう言っている志水先生の目に、もう涙がたまっている。

清田は、卓也に自分の詩を読まれることを嫌がっていた割には、ふてくされた態度を取りながらも、おとなしく二人のやり取りを聞いていたが、

「先生、なんでオレの詩で涙なんか出すんですか。やめてくださいよ」

と、志水先生に絡んでくる。

「いいじゃないか、涙出したって。詩に清田の心が見えて、自然と泣けてくるんだから、仕様がないうじゃないか」

「大人の男が、それも先生が生徒の詩を読んで泣くなんて、カッコ悪いですよ」

清田がどこまでも志水先生に絡むのは、いい詩だと褒められたことに照れているからだ。

「でも、清田さあ、ぼくも、この詩、いい詩だと思う。だって、読んで、清田のことちよつと分かった気がした」と、卓也が言う。

「山口、詩でオレのことが分かるの？ 詩らしい言葉を辞書から拾ってきて、並べただけだよ。オレの心から出てきた言葉じゃなくて、嘘の言葉ばかりで書いているだけだよ。それを真面目くさって読んじゃってさあ」

「そうなの？ 嘘なの？」

「そうだよ」

「じゃあ、班ノート、書かなきゃいいじゃないか。その方が清田らしいよ」

D 卓也は思っていたことを、清田にぶつけた。

「放つといってくれよ。オレの勝手だろ！」

志水先生はポケットのハンカチで、涙と鼻水を拭うと、

「詩は、全部を本当の言葉で書かなくてもいいんだぞ。清田が詩らしくなる嘘の言葉を、辞書から拾って書いたとしても、言葉を選ぶという時点で、清田の心が映されているんだ。だから、嘘の言葉はないんだ。ひとりぼっちという言葉はありふれた言葉だけど、ひとりぼっちという言葉と爆弾がくっつくことによって、清田の心になるんだ」

卓也には志水先生の言っていることが難しく、よく理解できなかつたが、嘘の言葉も本当の言葉になることがあるのだ

ということ、先生は言っているのだと思った。

「この間の山口の詩の〈宙ぶらりん〉という言葉は、イヤな店番とむすびついて詩になったし、清田の〈ひとりぼっち〉は爆弾や殴るといふ暴力的な気分と合わさって、詩になっている。二人とも、知らず知らずに自分自身の本当の心を書いてるんだよ」

志水先生は、そう言葉を続けながら、また、涙と鼻水を垂らしている。

「先生、鼻水出して、カッコ悪いですよ。先生がさっき言ってた嘘か本当かっていうなら、〈ひとりぼっち〉の言葉は、オレの本当の言葉です。実際、オレ、ひとりぼっちだから」

「えっ、清田、ひとりぼっちなの？」

「お前はひとりぼっちじゃないのかよ」

「だって、ウチは花屋をやっているから、いつもお客さんや誰やかやいるし、口うるさい両親もいるし、商店街からはざわざわした音が聞こえてくるし、ひとりぼっちになりたくてもなれないよ」

卓也の反応に、清田が半笑いの表情をする。

「山口、お前はお坊ちゃんだからさあ、オレのひとりぼっちが分かんないんだよ」

清田が卓也をあおる。

清田が神社の空き地で、卓也のキャッチャーをやってくれと言った時、卓也は、清田と友達になれるかと思ったが、今は、友達になれないと思っている。清田が時折見せる、卓也を小馬鹿にする態度が気に入らない。

「お坊ちゃんだなんて、馬鹿にした言い方するなよ！ 清田にだって、ボクの宙ぶらりんが分かんないだろ！」

大家の息子というだけで、いけ好かない木崎芳雄に父親がペコペコしている小さな花屋の子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！

私立中学校にも行かせてもらえない家の子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！

人手が足りないからって店番させられる子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！

4 清田に言い返したいセリフが、卓也の頭の中をぐるぐる回っている。

すると志水先生が、

「いいなあ、二人はいい友達になれるぞ。よかったなあ。二人とも初めて書いた詩で、お互いが、こんなに共鳴できるな

んで、めったにないことだぞ。いい友達だ。いいか、頼むから、山口も清田も詩を書き続ける。絶対に書き続けるよ」と、またまた、声を詰まらせている。

清田が、もう、うんざりだといわんばかりに、椅子から立ち上がった。

「先生、詩の話はもういいですか。オレたち部活なんです」

「おーそうか。ふたりは野球部だったな。ごめん、ごめん」

志水先生からやっと解放された卓也と清田は、急いでユニフォームに着替えて、教室から飛び出した。練習時間に10分は優に遅れているはずだ。

(ねじめ正一『泣き虫先生』による)

1. ———線部1に「読み終えて頭を上げた志水先生の目には涙がいつぱいたまっていた」とありますが、このときの志水先生の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 卓也の詩には、誰も知り得なかった複雑な家庭環境による苦悩が書かれており、その心情を〈宙ぶらりん〉という言葉で表現したことによって、心を開いてくれたことがわかり感動している。

イ 卓也の詩には、花屋の息子だからこそ経験する気持ちがかかれており、その心情を〈宙ぶらりん〉という言葉で表現したことによって、卓也と本当に心が通い合ったような気がして感動している。

ウ 卓也の詩には、誰もが経験する思春期特有の反抗的な心情が書かれており、その心情を〈宙ぶらりん〉という言葉で表現したことによって、詩に新たな命が吹き込まれたことに強く感動している。

エ 卓也の詩には、誰もが共感できるような後ろ向きな心情が書かれており、その心情を〈宙ぶらりん〉という言葉で表現したことによって、作品としての魅力が増していることに深く感動している。

2. ———線部2に「卓也は胸の辺りがざわざわするような気分になった」とありますが、このときの卓也の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア いつも乱暴でけんか早い清田が実は寂しさを我慢していると知り、同じ部活の仲間として心配している。

イ いつも乱暴でけんか早い清田がありふれた言葉でありながらも本心を繊細に表現した詩に、感銘を受けている。

ウ 乱暴な清田からは考えられないような言葉によって本人の弱さが表現された詩に、戸惑っている。

エ 乱暴な清田が〈ひとりぼっち〉や〈辛抱〉という、本心とは異なる言葉で詩を書いたことに、違和感を覚えている。

3. ———線部3「山口の詩の……一緒になるんだ」とはどういうことですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア どちらもありふれた言葉であり、辞書的な意味は異なるが、二人の心の内にある思いを表現したものであり、共に心の拠り所とよりどころがなくなっているという点において共通しているということ。

イ どちらも一般的な言葉であり、辞書的な意味は異なるが、二人の心の内を正直に表現したものであり、共に恵まれた環境に生まれたという点において共通しているということ。

ウ どちらもありきたりな言葉であり、辞書的な意味は異なるが、二人の心の内に秘めていた思いを表現したものであり、共に孤独と戦っているという点において共通しているということ。

エ どちらも斬新な言葉であり、辞書的な意味は異なるが、二人の心の内を明白に表現したものであり、共に目に見えない敵と闘っているという点において共通しているということ。

4. ~~~~~線部A～Dのときの卓也の気持ちを表す言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア A 得意 B 焦燥 C 不信 D 激高

イ A 満悦 B 汗顔 C 関心 D 疑問

ウ A 満足 B 羞恥 C 対抗 D 不満

エ A 本望 B 屈辱 C 心配 D 不快

5. ———線部4に「清田に言い返したいセリフが、卓也の頭の中をぐるぐる回っている」とありますが、このときの卓也の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 教室から今すぐ逃げ出したい気持ちなのに、小さな花屋の息子である自分を勝手にお金持ちだと決めつけて皮肉を言ってくる清田に対して、我慢の限界を感じている。

イ 大家の息子というだけでペコペコして相手に迎合する父親や、その父親から人手が足りないからと店番を押しつけられても断れない自分に対して、情けなく感じている。

ウ 自分への抵抗心を隠そうともせずにはつきりと表してくる清田に比べて、正直な気持ちを相手にぶつけることができない自分に対して、ふがいなく思っている。

エ 小さな花屋の息子であることで不満に思っていることがたくさんあるのに、その気持ちをわからず嫌味いやみを言うってくる清田に対して、不愉快に思っている。

6. 登場人物の説明として適当なものを二つ選び、符号で答えなさい。

ア 卓也は自分にもあてはまる境遇を独自の言葉で表現した清田の詩を読んで、共感している。

イ 清田は卓也の詩を読んで自分には作れない詩だと感じ、卓也にはかなわないと諦めている。

ウ 志水先生は卓也と清田の詩を読んで、それぞれが相手の抱える悩みを理解できるはずだと感じている。

エ 卓也は自分を小馬鹿にしてくる清田に対して、出会ったときからずっと敵対心を持っている。

オ 清田はクラスや部活で周りに人はいるものの、自分のことを精神的には孤独だと感じている。

カ 志水先生は情に厚い人間であるが、生徒の前では自分の気持ちをおさえてふるまうことができる。

7. 次の会話文は、【X】「宙ぶらりん」・【Y】「ひとりぼっち」の二つの詩について、先生と生徒が話し合っている場面です。これを読んで次の(1)～(3)に答えなさい。

先生 「それではまず、詩の形式について確認をしましょう。Aくん、この二つの詩の形式は何でしょうか。」
 Aくん 「はい。Xの詩は【I】で、Yの詩は【II】だと思います。」
 先生 「そうですね。次にBさん、Xの詩の表現の特徴について何か気づいたことはありませんか。」
 Bさん 「Xの詩には【III】という表現技法が使われていて、これによって【IV】と思います。」
 先生 「Aくん。Yの詩についてはいかがですか。」
 Aくん 「Yの詩には【V】という表現技法が使われていて、これによって【VI】と思いました。」

(1) 【I】・【II】にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア I 口語自由詩 II 文語自由詩 イ I 口語自由詩 II 口語定型詩
 ウ I 文語自由詩 II 文語定型詩 エ I 文語定型詩 II 口語定型詩

(2) 【III】・【IV】にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア III 体言止め IV 詩に余韻や強い印象を与えている
 イ III 擬人法 IV 詩の調子を整えてリズムを与えている
 ウ III 擬人法 IV 作者の思いを強調することができる
 エ III 体言止め IV 読者が詩の場面や状況を理解しやすくなっている

(3) 【V】・【VI】にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア V 直喩 VI 詩に余韻や強い印象を与えている
 イ V 対句法 VI 詩の調子を整えてリズムを与えている
 ウ V 反復法 VI 作者の思いを強調することができる
 エ V 隠喩 VI 読者が詩の場面や状況を理解しやすくなっている

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一般的に、個人の価値観は社会共通の価値観に基づいて形成されるため、それほど周囲の人々の価値観と大きな違いは生じない、と考えることができる。¹

子どもに対する親の要求や期待は社会の価値観や文化的慣習に準じたものであり、それによって子どもの内面に形成された価値観・自己ルールは、社会生活のなかでさらに一般性のあるものに修正されている。そして、社会全体に浸透している価値観に基づく行動であれば、社会はそれを正当な行為と見なし、批判するようなことはない。むしろ共感や賞賛に値する行為として評価され、その社会の人々から広く承認を得ることができる。

古来、社会は特定の宗教や文化的慣習、政治的イデオロギーを共有し、その価値観に基づく社会規範によって成り立ってきた。中世ヨーロッパのようにキリスト教への信仰が強い社会なら、親もその他の人々もキリスト教に基づく価値観、慣習を要求し、それに基づく行為のみを承認するため、自然に同じような価値観や慣習を身につけることになる。中近東諸国のイスラム教にしろ、少し前までのソ連や中国の共産主義にしろ、すべて同じことが言える。宗教や政治思想でなくとも、一定の社会的慣習や共有された価値観があれば、それは個人の内面にまで浸透し、人々はその価値観に準じて行動することに²なるのだ。【①】

したがって、特定の価値観が共有された社会、特にその価値観が強い影響力を持つ社会では、価値観の異なる多様な人々を想定する必要性があまり生じない。いちいち他者の立場を顧みなくても、その価値観に沿った行動の価値を信じることができるし、結果的に周囲の承認を得る可能性も高いからだ。成長過程において親以外の人々の価値観に触れても、そこ²にあまり違いがないため、その価値を再検討する必要性も生じないし、「一般的他者の視点」も形成されにくい。

しかし近代社会になると、自然科学の発展にもなつて宗教的価値観の絶対性はゆらぎ、A交通手段の進歩と社会構造の変化により、世界の多様な価値観が²出会うようになる。それは多様な価値観のなかで共通性を求め、より一般性のある価値を考えようとする視線を生み出したと言える。普遍的な価値を求めて、人間はさまざまな立場の人々を想定した上で、誰もが納得し得る価値判断を導き出そうとした。「一般的他者の視点」とは、まさに近代社会におけるこうした要請が生み出した視線なのである。

B 現在、一般性のある価値、普遍的な価値そのものへの疑義が増幅し、価値相対主義が蔓延^{まんえん}している。こうなると、表面的には保たれているように見える社会規範や社会共通の価値観も信頼できず、自己価値にもゆらぎが生じざるを得ない。社会が共有する大きな価値を信憑^{しんぴょう}し、それに準じた行動を取れば自己価値も保証される、という状況はもはや崩れつつあるのだ。【②】

こうした社会では、自己価値を確認するための価値基準が見えないため、身近な人々の承認だけが頼りになる。そのため、親の影響下に形成された自己ルールや価値観は、一般性のあるものに修正することが難しくなり、親の承認に執着し続けることになりやすい。あるいは、自分の価値観・自己ルールに自信が持てず、仲間の承認を維持するために同調し続ける人もいるだろう。他者の承認を無視して自己中心的に自己承認する場合もあるが、大抵は一時的なものにすぎない。

いま、多くの若者が強い承認の不安を感じ、「空虚な承認ゲーム」に陥っている背景には、こうした現代特有の心理が潜^{ひそ}んでいる。価値観の相対化という時代の波のなかで、多くの人が自己価値を確認する参照枠を失い、自己価値への直接的な他者の承認を渴望しはじめている。そして身近な人々の承認に拘泥^{きうでい}したコミュニケーションを繰り返した結果、極度のストレスを抱えたり、その承認を獲得することができず、虚無感や抑うつ感に襲われている。

現代が承認不安に満ちた時代なのは、まさにこのような理由からなのである。

この章では、人間の承認欲望がいかにして生まれ、その対象や内実を変えてゆくのかを心の発達に即して考えてきた。親の親和的承認から仲間の集団的承認へ、そして社会における多くの人々からの一般的承認へと、承認欲望がその対象を拡大するにつれ、各々の承認は相互補完的に承認不安を解消し、自己価値の失墜を防ぎ、「生きる意味」を確保するようになる。

一方で、私たちは他者の承認を介して価値観と自己ルールを形成し、ある程度まで他者の承認がなくなるとも、自らの行為に価値があることを信じ、自分の存在価値を自己承認することが可能になる。それは社会共通の価値観に準じたものである限り、実際に周囲の承認を得ることもできる。

しかし、社会共通の価値観への信頼がゆらぎ、価値相対主義的な見方が広まりつつある現在、「一般的他者の視点」は育まれず、自己価値の承認を確保する上で、身近な人々の承認がきわめて重要なものになっている。かつては成長過程のなかで、身近な他者の承認に固執している段階から、社会共通の価値観に基づく他者一般の承認に眼^めが向けられていた。【③】
とはいえ、異なった価値観の人間同士の間にも共通理解の可能性がないわけではない、と私は考えている。

C、まったく趣味や感性、信条の異なる人間の間でも、困っている人を助けるのは「価値ある行為」である、と普通

1. A D にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア しかも イ したがって ウ たとえば エ だが

2. ——— 線部1に「周囲の人々の価値観と大きな違いは生じない、と考えることができる」とありますが、ここで筆者がこのように述べるのはなぜですか。「くから」に続くように五十八字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

3. ——— 線部2「一般的他者の視点」を説明している部分を三十七字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

4. ——— 線部3『空虚な承認ゲーム』に……潜んでいる」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「こうした現代特有の心理」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 価値観の多様化の中で他の子どもと比べられ続けることで自分に自信がなくなっているため、多くの子どもが親に依存し親の言いなりになってしまう心理。

イ 価値観の多様化の中で情報量の多さから自分を見失い極度のストレスを抱えてしまっているため、多くの若者が自分のことを過剰に発信して周りの人から認めてもらおうとしてしまう心理。

ウ 価値観の多様化の中で多くの人が自己の価値を確認する物差しを失っているため、個人が身近な人々の承認を強く求めて自由に自己の感情を表現できなくなってしまう心理。

エ 価値観の多様化の中で自分に自信がなくなってしまう空虚感や抑うつ感に襲われているため、多くの人が自己価値を確認する基準を見失って他者に理由なく同調してしまう心理。

(2) 「空虚な承認ゲーム」が人の心の中に生み出すものとは何ですか。十五字で探し、抜き出しなさい。

5. ——— 線部4に『一般的他者の視点』が必要とされる時代に突入した」とありますが、その理由を解答欄に合うように、ここより前から三十五字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

6. 本文には次の一文が欠落しています。この一文は本文中の【①】～【④】のどこに入りますか。最も適当な箇所を選び、数字で答えなさい。

しかし現代社会では、この移行がうまく進展しないのだ。

7. 筆者は「自由」の意識を得るためには「一般的他者の視点」が必要だと述べています。その理由を「『一般的他者の視点』があることで」に続くように四十字以内で答えなさい。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 鳥の剥製を飾る。
- ② 繁忙期で人手が足りない。
- ③ 裁判で情状酌量を求める。
- ④ 今回の件ですっかり懲りた。
- ⑤ 人の心を弄ぶようなことはやめよう。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① これまでの制度をハイシする。
- ② 私たちはモウモクだった。
- ③ メイヨある賞をいただく。
- ④ 趣味の盆栽にコロ。
- ⑤ 落ち込む友人をハゲます。